

満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所の日輪兵舎(昭和13~14年頃)(下、『写真記録茨城20世紀』より)。満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所之碑(右、元義勇軍訓練所正門跡付近に昭和50年4月に建立された。高さ約7.5m)



戦時下の土浦中学生5～満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所～

水戸市内原町の JR 常磐線内原駅から南東へ約1kmの所に満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所跡地があります。日中戦争から太平洋戦争にかけて、「内原」の名は、満蒙開拓青少年義勇軍とともに全国に知られました。14・15歳から18歳の義勇軍の若者たちは、内原駅から満州へと渡っていきました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

満蒙開拓青少年義勇軍

満州(現中国東北部)への移民は、満州国が建国された1932(昭和7)年から、関東軍の主導のもとに始まりました。1936年5月、日本政府は、重要国策の一つとして、「満州農業移民百万戸移住計画」を発表し、戸数10万、人数500万の農業移民入植計画【昭和12年～31年】を打ち立てました。しかし、翌年、日中戦争が勃発したため、軍隊要員として不可欠な成人男子の移民が困難になりました。そこで、政府は、同年11月3日に加藤完治ら6名によって提出された「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」を踏まえて、14・15歳から18歳までの少年の移民計画に着手しました。

1938年1月、政府は、「片手に鋏、片手に銃」をキャッチフレーズにして、満蒙開拓青少年義勇軍の募集【応募条件は、小学校を卒業し、数え年16歳から19歳までの身体強健なる男子で、父母の承諾を得た者】を始めました。自由応募が原則でしたが、実態は、当局から各道府県【当時、東京は大阪・京都とともに「府」だった。】への割り当てがあり、更に、道府県から各学校への割り当てが決められていました。それに応じ、各高等学校の担当教師により、卒業生に「自主的に応募するように。」との働きかけがなされ、早くも同年4月8日には、義勇軍第1次訓練生の渡満壮行式が内原訓練所で挙行され、義勇軍5,000人が満州に渡りました。

さらに、同年6月、農林・拓務両省による「分村移民計画」が作成され、翌年12月22日には、日満両国政府が「満州開拓基本要綱」を発表し、満州移民事業が「日満両国の一体的重要国策」として位置付けられました。満蒙開拓青少年義勇軍については、日満両国の開拓関係機関で創る

訓練本部を新京に置き、各機関の協議によりこれを運営することとしたため、満蒙開拓青少年義勇軍の重要性が、より一層強調されました。その結果、貧困のため活路を満州に求める農村の青少年たちは、満州で「十町歩地主」になることを夢見て、義勇軍に応募しました。各道府県で選抜された若者たちは、茨城県内原町の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所での3ヶ月の基礎訓練と満州国の現地訓練所での3ヶ年の訓練を経て、「義勇隊開拓団」として入植しました。この満蒙開拓青少年義勇軍には、1938年から1945年の敗戦までの8ヶ年の間に、8万6530人の若者が送り出され、満州開拓移民送出事業総体の人員の3割を占めています。

満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所

満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所は、日本国民高等学校【農本主義に基づく、デンマークの国民高等学校をモデルとして、1927年に西茨城郡天戸町(現笠間市平町、常磐線友部駅南東約2km)に農村の中堅人物の養成を目的に創立された。初代校長は加藤完治。1935年に内原に移転され、現在、日本農業実践学園として存続している。】の農場を中心として、日本国民高等学校協会と満州移住協会とによって、1938年2月に設立されました【所長を加藤完治が兼務し、満州側現地訓練所は満州拓殖公社が建設した】。訓練所の敷地は40ha、日輪兵舎が300余棟設けられ、常時数千人の若者が訓練を受けていました。生徒300名を標準として1個中隊が編成され、中隊は5個小隊に分かれ、1個小隊ずつ日輪兵舎で起居を共にしました。毎日の生活は、軍隊と全く同じでラップで起き、ラップで寝る生活で、予科練同様に分刻みの厳しい訓練が行われていました。1939年には、土浦中学生たちも訓練所を見

学し、5年生藤平貞雄(中39回)は、『進修第43号(1940・昭和15年3月1日発行)』に「内原訓練所見学の記」を寄稿しています。「水戸市の南三里常磐線内原驛より約十五町、日本国民高等学校に隣接する別天地、こゝぞその名も高き、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所である。その入口には、カーキ色の制服に戦闘帽姿も凛々しい歩哨が立つてゐる。受付から案内係に付いて行くと、種々様々な建物、大小三百餘棟の日輪兵舎が眼前に展開する。それら無数に点在する日輪兵舎や、一段と高い本部建築から学校の朝禮台の様なもの迄、すべて皮の付いてゐる儘の丸木を半分に割つたもので作つてあり、あたかも山奥の木樵小屋を見るやうである。案内者の話によると此所に在る大部分の建物は凡て生徒の手によつて作られたもので、普通一小隊が入れる日輪兵舎は六十人あれば、一日で作れると言ふことであつた。大食堂など勿論日輪型であるが、凡てが理想的に無駄の無い様に利用されてゐることには本當に驚かされた。又此處へ来る者は、入所當時は、規律正しい厳格な生活に、非常な束縛を感じるさうであるが、約三箇月たつて、いざ此處を離れて満洲に行くことになると、非常な懐しみを感じて離れにくくなることであつた。そして都會の影響を受け、多分に都會の風を吸つた者ほど、満洲の地に行つて、どん底の生活をするには耐えられないと言ふ事であつた。又此處の訓練は、皇國農民精神と、大陸開拓に必要な心身の鍛錬と東洋平和確保の礎たらんとする事を目的として、やつてゐるさうで、その食物も満洲の氣候風土に適した最も簡單で最も栄養に富んだ物を與へてゐるとの事であつた。種々説明を聞いた本部側の教室の様なトーチカ式建物の中には、

入所する者の年齢や職業、病氣の種類、脱逃者の數等いろいろの統計を取ったグラフなどが張つてあつたり、滿洲の地の種々の寫眞等がか、げてあつた。外へ出ると、廣大な平地には、周圍に標的があり、一隅には掩蔽壕、土俵などがあつた。丁度戰闘教練や消防訓練の最中であつたが、皆非常に熱心で元氣溼刺として外から見ても誠に氣持よく感じた。それから軍隊式に規律正しく教育されてゐるには驚かされるので、本部迄案内してくれた者の言葉態度など全く立派なもので、こちらが顔負けするくらゐであつた。方々見學して先づ目に付くことは、建物の簡易粗末よりも、どの兵舎のドアにも皆日の丸が付いてゐる事やその入口に種々の樹木が必ず植ゑてあることである。又各兵舎の周圍には溝が掘つてあり、土がもり上げてある、温度を逃がさぬ爲であらう。そしてその内部には、眞中の柱の周圍に眞新しい水筒がきちんと下つてゐる。壁際には飯盒やトランク、行李、書物等各自の持物や寝具がきちんと整頓されて在る。誰もその上に二階があるとは思つてゐなかつたので、その利用のたくみなものには皆少なからず驚かされた様だつた。それから便所も日輪型で、ちやんと消毒して綺麗にしてある。なかなか上手に利用されてゐるもので、こういう型の便所は誰しも生れて始めてあらう。少し行くと各中隊の風呂場、炊事場などがあり、數名の當番生徒が居て、各仕事に従事してゐた。又井戸掘をやつてゐた組があつたが、本職の井戸屋の様に上手であつた。途中仕事の様子を見學したが、砂を運ぶ者、兵舎の修繕大工をやる者、屋根葺をやる者、兵舎内の改造をやる者、道路や溝を作る者凡て指揮者も何も彼も一體になつて熱心に働んでゐるのが特に

目に映つた。尚進んで行くと、堆肥製造所、馬場、廣大な畜舎、夜學教室等種々なものが在る。續いて木工室、此處には木造機械類が澤山ある。次は竹細工室、菓細工室、こゝでは仕事に用ふる種々の策【ざる】や籠【かご】等いろいろの必要な品を作ると言ふことであつた。又少し行くと、一つぼつたり菓茸のトーチカ式建物が在る、これは此處で一番最初に建てた日輪兵舎で片見に残して置くのだからだ。その隣には堂々たる佃煮加工場、麴麵製造所、共同焚事場等がある。これは専門家の建てた立派な建物であり、共同炊事場は渡滿前忙しい時等に、此處で一緒に炊事をするのださうだ。續いて味噌醬油の醸造所が在る。これは日輪型の相當大きな建物であつたが、唯、一部分壁を塗つただけで完成してゐなかつた。養魚場を左に見て、尚前進を續けると、生徒が道路工事や松林の芝刈をやつてゐるのが目につく、皆黙々として働いてゐる。大通を横切つて行くと鐵工場が在る、生徒が鋏の焼入れから唐鋏の製造、萬能の修理等迄すべて自分等の手でやつてゐる。これには皆非常に感心した。次は診療所である、粗末な丈の低い建物だが内部は驚くほど立派である。各診療室にはあらゆる器具機械類があり、看護婦が忙しげに働いてゐる。その裏には、より一層近代的裝備がされてゐる新しい立派な建物がある。此處にはレントゲンやその他種々の重要な機械類が在り、今迄の處と別世界の様な感じがする。その隣りには少し離れて日當のよい、綺麗な障子張りの座敷のある建物が在る。中に白衣を着た人が讀書してゐた。此の訓練所では丈夫な者は力一杯働いてゐるが、一旦病氣になつた者は大切に保護されてゐると言ふことである。そしてこれら病人は

電燈も付いてゐて普通の家と少しも變つてゐない、靜かでよい所に病後を養つてゐる。斯くて大體見學も終つたので、本部側の建物へ歸つて麥湯を御馳走になりながら晝食を取つた。歸る途中鋏や『モツコ』を擔ぎ、隊伍正しく歸つて來る作業實習班や、銃を執ひ、きちんと伍を組んで軍歌を歌ひながら、歩武堂々と歸つて來る教練班等に出會つた。此等を見て私は非常に氣持よく感ずると共に、非常に心強い感に打たれた。啾唳たる喇叭の音が響いて來た。集合喇叭だ。……我等はこゝに別れを惜しみつゝ、懷しの訓練所を出た。來る時にはさほど立派な所であるまいと思つて來たのに、歸りにはこれ程心が變るものかと、その心境の大きさに唯々驚かざるを得なかつた。嗚呼想へば今日は有意義な一日であつた。私は蔭ながら聖鋏の使徒に、滿蒙の開拓者に幸多かれと祈つた。」

渡滿

生徒たちは、内原訓練所で3ヶ月の基礎訓練を受けた後に、滿洲の現地訓練所に入所し、電氣もなければ水道もない、ランプでの生活を始めました。自分たちで宿舍を建てなければならなかつた場所もあり、煉瓦造りに失敗した所では、マイナス30〜40℃にもなる冬季には、宿舍の中で凍死する者も出たと言います。食事は自炊で、主食は高粱を大量に炊き込んだ高粱飯、副食はかぼちゃなどでした。冬になって野菜がとれなくなると、「太平洋汁」という名の具なしの塩汁になりました。

各人には小銃と実弾100発とが渡され、農業実習とともに軍事教練も行われました。政府にとつての彼らの位置づけは「兵士予備軍」であり、訓練が終了すると、ソ連との国境近くの開拓地【中国人の耕

作地を日本政府が強権的に安い値段で買上げたもの】が与えられました。彼らは「十町歩地主」を夢見て【政府は「十町歩地主」になれると宣伝していた】、酷寒猛暑を克服し、ひたすら開拓の鋏を振るいつけました。

満洲の現地訓練所入所式（昭和15～16年頃）（下、『滿蒙開拓青少年義勇軍写真集』より）。滿蒙開拓殉職者之碑（右、水戸市内原町の地藏院、義勇軍の遺骨26柱、内原訓練所死亡の9柱、武器具池の工事の殉職者2柱の計37柱を合祀しています。高さ約2m）



しかし、藤平の祈りとは裏腹に、義勇軍をはじめとする滿蒙開拓団の人々は、終戦により悲惨な運命を余儀なくされました。敗戦時、滿洲には150万の民間人と50万の關東軍兵士とがいました。侵攻して來たソ連軍によって、シベリアやモンゴルなどに抑留された日本人は63万、うち過酷な環境により死亡した人は6万6400に及びます。この抑留者の死亡を含めて、ソ連の侵攻後に亡くなった人の総数は、24万5400と言われています【義勇軍隊員総数8万6530のうちの死亡者は2万4000であった】。生き残つた人たちは、苛酷な体験を重ねて引き揚げましたが、帰国の術がなかつた多數の人々が、残留孤兒や残留婦人として取り残されました。日本政府は、国策によつて滿洲への移民を勧めながら、1945年5月の時点で、日本軍はソ連国境付近からの撤退を既に開始しており、開拓民は置き去りにされ、国や軍から完全に見捨てられていたのです。